

ディレクター日誌（活動・子どもたちの様子）

期 日：平成30年7月27日（金）～8月4日（土）【8泊9日】

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家周辺の山域（山口市阿東）

参加者：県内の小学5・6年生（男子16名、女子16名）

1日目「開会式・ダッフルシャッフル・バックパッキング」

期 日：平成30年7月27日（金）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～方丈原

平成30年度のチャレンジプログラムの始まりである。初めて出会う仲間との9日間のスタート。子どもたちの表情からはドキドキとワクワク感が伝わってくる。

開会式では、チャレンジがもう始まっていることを話した。「申し込んでみようと思ってハガキを出したこと」「今日まで準備してきたこと」「今日の朝に家を出たこと」がチャレンジである。またせっかく集まった8人（1つの班の人数）だから9日間を通してみんなで挑戦して欲しいことを話した。「仲間になってほしいこと」「いろいろな『できた!』『やった!』『できない…』『苦手だ…』を体験して欲しいこと」「新しい自分の一面を発見して欲しいこと」を話した。そしてそこから更にもう1歩前に進むチャレンジの大切さを曲とともに伝えた。

装備の準備やダッフルシャッフルが始まり9日間の準備をする。物の名前や使い方も分からない中での活動である。同じ班の仲間との距離もまだ近くない。子どもたちの不安は大きくなっているだろうが、班についているスタッフが上手に関わりながら活動が進んでいく。持って歩く装備や食料がザックに全て入って背負ってみる。ランドセルとは比べものにならない重さに衝撃を受けたようだ。



準備ができた班から今日のテン場（＝宿泊地）へ出発していく。重たい荷物を持って初めての歩きである。暑さもあってなかなか足が進まない。インストラクターは歩き方や水分補給の仕方、休憩の取り方や声のかけ方を丁寧に教えながら、なんとか本日のテン場である方丈原へ到着した。

テン場に到着してからはテントの設営の仕方やトイレのトレーニングをする。テントやタープの設営も子どもたちにとっては初めての体験である。インストラクターに習いながらみんなで立てることができた。山の中での過ごし方を習った後は夕食の準備をする。今晚のメニューはマカロニシチュー。慣れない包丁や鍋を使い、美味しい晩ご飯ができた。家にいるときには待っていれば食べられる食事でも自分たちで作る。おそらくひと味違ったものになったと思う。

夕食後のミーティングでは本日の活動を振り返りつつ、9日間を通しての個人やグループの目標についてインストラクターから話があった。これからたくさんのチャレンジがある9日間にしてほしいと思う。

2日目 「バックパッキング」

期 日：平成30年7月28日（土）

場 所：方丈原～十種ヶ峰山麓駐車場～十種ヶ峰青少年自然の家

2日目の始まり。山の中では、明るくなったら活動開始、暗くなったら活動終了が基本である。そのため普段の生活より起床時間は早い。慣れないテント泊で眠りの浅かった子もいるであろう。朝の動きはまだゆっくりしている。テントやタープを撤収し、荷造りを終えたら、いよいよ本格的に山を歩く。

今日の活動は本当なら十種ヶ峰の林道を通って神角という場所まで歩く予定だったが、台風が山口県に接近しているので、安全を考慮して明るいうちに体育館に戻るようにした。したがってコースを変更し、途中まで林道を通り、神角へ下らずに十種ヶ峰の山麓駐車場を経由して自然の家の体育館まで歩くコースとした。

方丈原を4つの班が次々に出発していく。みんな笑顔で、中には班のみんなで歌を歌いながら元気よく出発していった。

出発後、林道に入る手前にワサビ田がある。ここから湧き出ている清水でのどを潤す。その美味しさに子どもたちから歓声が上がった。普段蛇口をひねったら出てくる水や冷蔵庫で冷えている飲み物とは違い、この暑さの中での自然からのプレゼントは格別の味だと思う。その水で顔を洗ったりバンダナを濡らして首を冷やしたりしてリフレッシュ。たくさんのエネルギーが充填された。

ワサビ田を出発して林道に入る。林道には日差しを遮ってくれる木々がある。コンクリートと違って足下が堅くなくて歩きやすい。ここでも自然のありがたさを感じることができる。しかしタラやキイチゴなどトゲのある植物が多く、子どもたちにはストレスも多くかかる。インストラクターは安全に山を歩く為に危険な植物の見分け方や、歩いているときに後ろの人へ情報を伝えながら歩くといいことを教えていく。子どもたちは「足下注意」や「これ痛いから気をつけて」など上手に声をかけ合いながら歩いた。



林道を抜けたら最終的なゴール地点である十種ヶ峰の山頂を後ろに見ながら、自然の家の体育館へと下山した。体育館へ戻ってくる子どもたちは昨日方丈原へ到着したときとは違い、班の仲間同士の距離も近く、みんなまとまって元気な笑顔だった。達成感と充実した1日だったことが感じられる瞬間に体育館で待つ本部スタッフは喜びを分かち合った。

台風に備えて体育館に避難しているが、プログラムは続いている。体育館での活動は山の中のテン場と同じように行った。



3日目 「トレーニング」

期 日：平成30年7月29日（日）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家体育館

3日目、体育館の外は台風通過の影響で雨が降っている。体育館の中では子どもたちもスタッフも起床から朝食へと活動を進めていった。

今日は安全の確保のため、終日体育館で過ごすこととなる。動く日数が1日減ることはもったいないと思うが、大切な1日であることに変わりはない。

このキャンプは4つのフェーズで構成されており、最初の2～3日間はトレーニングフェーズと位置づけられている。各班のインストラクターは2日間を過ごして見えてきた子どもたちの様子にあわせて、それぞれがトレーニングの日とした。1日移動しない分、明日以降に向けてじっくりトレーニングできる。

ある班はパッキングからザックの担ぎ方までを半日かけて行った。これで明日以降はテント場からの出発準備はスムーズになるだろうし、班の仲間が持っている荷物についても改めて確認することができた。共同装備や食料をどのように分配するとよいかを再度話し合う機会にもなった。

別の班は時間をかけて今日までの2日間を振り返る時間に充て、9日間の班の目標についてじっくり話し合った。1人1人の参加に至った経緯や個人の目標を共有し、8人が全員のゴールを見据えて思いを近づけていった。

他にも体育館の中でザックを背負って歩き方のトレーニングをしたり、カップを着たり、装備の使用方法を確認したりと、それぞれの班が時間を有効に使って活動した。

朝から活動の様子を見ていると、班の活動を指導しているインストラクターを中心とした子どもたちの輪が時間の経過とともに小さくなっており、お互いの距離が近づいていく様子が見える。山を歩くことはできなかったが今日1日が子どもたちにとってステキな1日になったことと思う。

夕方には雨も上がり、明日以降の心配もなさそうである。初日に保護者と別れた体育館で1日を過ごしたことによりホームシックにかかった子も何人かいたが、インストラクターや仲間の声かけにより明日以降への前向きな気持ちを再び持ち直していた。



4日目 「バックパッキング」

期 日：平成70年7月30日（月）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家～神角

台風一過の好天の中、今日は当初2日目に歩くはずであったコースを歩いて神角を目指す。2日目に通ったトゲが多かった林道を通り、神角まで下っていくコースとなる。昨日、体育館でパッキングや歩き方のトレーニングをした子どもたちは、活動に対する意識が自分1人のことだけでなく仲間に向けられたものとなっており、初日と

は違ってスムーズに、1班、また1班と元気よく出発していった。

しかし1つの班が体育館から出てこない。「行きたくない」という子がいて班の動きがストップしているとのこと。インストラクターとサブインストラクターはそれぞれ分かれて子どもたちと話をする。行きたくない子へは少し離れた場所で話を聞く。行きたくない理由やどうしたいのかをじっくり聞く。残りの7人の子にはその子の思いを伝え、グループとしてこれから「どうしたい」のかを話し合う。時間はかかったが、8人でゴールをしたいという子どもたちの思いがグループを前へと進ませることになった。体育館の外で待っている7人に合流し、楽しそうに歌を歌いながら歩き出した。8人の意識がお互いに向き合い、前を向いて歩く今日1日はきっと素晴らしいものになるのではないかと体育館から見送りながら感じた。この班は結局もの凄いペースで今日の行程を歩き、あっという間に神角に到着した。一緒に歩いているインストラクターとサブインストラクターが圧倒されるくらいエネルギーを出せたことは、朝の体育館での時間があつたからかもしれない。

別の班は、2日目に林道から登ったところに落とし物をしたということで、神角に下らずに登って探しに行くことを決めていた。本来なら神角まで下れば今日の行程は終了である。そこに山登りと捜し物という2つの予定外の活動が加わる。普通に考えれば暑い中で重たい荷物を背負っての活動の中では少しでも早くテン場に到着したいと思うだろう。それでも班の中で8人が話し合い、落とし物をした個人を責めることもなくグループが9日間を過ごすことに必要なこととして探しに行った。



昨日の台風で飛ばされることもなく、無事に捜し物は見つかり、この班もここから元気に神角へと下った。回り道をしたが、この動いた導線が今回のこの班のルートとなる。最短で目的地へ向かうルートもあるだろうが、それが全て正解というわけではない。中身の充実したこのルートはこの班に学びと達成感を与えてくれたと思う。

他の班も2日目に歩いたコースであるということもあり、ワサビ田の水を楽しみ、トグをみんなで上手によけながら神角へと下りてきた。

神角でテントやタープの設営を終えた子どもたちは、この旅初めてのディップ（＝水浴び）に向かった。1日歩いて疲れた体に冷たい川の水が心地よい。木陰を与えてくれる木々や涼しさを与えてくれる風と同じように自然からのプレゼントを受け取った。後半出発した班には夕立のシャワーのおまけまでついてきた。

5日目 「ソロ」

期 日：平成30年7月31日（火）

場 所：神角

今日は終日神角にてソロとなる。ソロの時間は今までの「動の活動」から「静の活動」となる。また、今日までグループでいたが1人になる。インストラクターからソロの目的や気をつけることが伝えられ、1人ずつ指定の場所へ入っていく。

子どもたちは横になって目を閉じて疲れを癒やしたり、今日までの4日間（自分のことや仲間のこと）を振り返ったり、またはこのキャンプに来る前の学校での友だちのことや家族のことを考えたり、それぞれが与えられた場所で思い思いに過ごす。

また、このソロの時間には家で待っている保護者からの手紙が子どもたちに渡されている。9日間を過ごすにあたり、励ましや思いを伝える手紙を受付時にスタッフが受け取っていたものだ。子どもたちはその手紙を読んでいろいろなことを感じたことと思う。そしてスタッフが用意した便せんに返事を書いた。

このキャンプで過ごしていると、水や電気やガスのように今までの生活で当たり前であったことがどれだけありがたいかがわかる。一緒に過ごしていた家族についても同じである。たくさんのかんじをかんじてかんじてもらえたソロの時間になったと思う。そして、自分自身をもう一度見つめ直し、残りの行程やこれから日常生活に戻ってから、たくさんのかんじに挑戦するきっかけになってもらえればと思う。



夕方になって子どもたちがインストラクターに連れられてソロサイトから戻ってきた。班の全員が揃ってタープの下に入る。ここでいよいよソロ明け（しゃべってもよい）。今日1日一緒にいなかっただけが仲間との再会に次々と思いが溢れ出す。今日かんじた個人やグループのかんじが夜のミーティングでは明日以降につながって新たにスイッチを入れることになると思う。

また、本部では明日の行程のコースチェックを行った。7月の豪雨を受けてコースチェックを直前までおこなってきたが、林道が倒木によって塞がっている情報が午後になって入ってきた。急いで自然の家スタッフの手を借りて撤去に行くという場面があった。チェーンソーや鉋によって1時間ほどで林道は通れるようになったが、何度もコースの下見をしてもギリギリまで何かあるのかわからないということをおんじ知らされた。

6日目「グループツアー」

期 日：平成30年8月1日（水）

場 所：神角～鍛冶ヶ原林道奥

今日から再びグループでのバックパッキングが始まる。今日の行程は前半車道を歩いて進み、後半は林道に入って奥まで進むルートとなっている。この夏は暑い日が続き、スタッフは熱中症対策に苦慮していた。前半の車道を通るところは、日差しを遮る木も無く、加えてアスファルトの照り返しがきつい。要所要所への水ポイントの確認を入念におこなって1日が始まった。

少しずつグループとして成熟しつつある各班はそれぞれが神角を出発していく。行程のきつさもお互いに意識を向け合いながらみんなで順調に林道へ入っていった。

1つの班が紛失物があり神角にて捜し物をしていった。暑い日が照る中での捜し物は辛い。せつかく昨夜まとまってきたグループが再び個々の動きに変わっていく。黙々と探している子、疲れて自分だけ休憩をとっている子、友だちと話しているだけの子

など、目に見えてバラバラの動きが目立つ。インストラクターは8人の目的が何だったのかを問いかけ、今までの時間を振り返るとともに、何をするのか、どうしたいのかをみんなで確認する。子どもたちは捜し物が見つかったら出発することを選択し、今度はみんなで探した。インストラクターが探すことを指示するのではなくグループの総意で探す。この時間はさっきまでとは違ってこの班にとってとても大切な時間となった。結果、正午を過ぎても捜し物は見つからなかった。先にも述べたが今日のルートは炎天下の道路を歩く。このままだと午後一番暑い時間を歩くことになるため、本部の判断で出発してもらうこととした。午前中の活動の中身とこれからのこと、紛失物が見つからないことや安全管理等々を全て考慮した上でこのことで、子どもたちにそれを伝えた。子どもたちは「これだけ探したのだから」や「今日のテント場でもう一度探そう」など、活動を中断されたことを後ろ向きに受け取らず、これからの行程に意欲を持って神角から離れた。



林道の途中には本部スタッフからのプレゼントのスイカが沢の水で冷やされて待っていた。冷たい大きなスイカをみんなで分け合う。ここでも沢の水の冷たさがたくさん喜びを与えてくれた。スイカはあっという間に子どもたちのおなかへと消えていき、子どもたちは水で体の火照りを冷やしたりしながらエネルギー補給をし、最後の1歩を踏み出した。

明日はいよいよファイナルツアーである。ここまではインストラクターとサブインストラクターと一緒に歩きトレーニングを積み重ねており、少しずつグループに主導権を移行してきた。明日は子どもたちだけでのツアーとなる。インストラクターたちは離れずに側にいるが、基本的には口を出さない。台風の襲来で想定よりやってきたことは少ないが、子どもたちの最後のツアーが素晴らしいものになることを願う。

7日目「ファイナルツアー」

期 日：平成30年8月2日（木）

場 所：鍛冶ヶ原林道奥～十種ヶ峰山頂～電波塔周辺

ここまでの6日間、グループとして少しずつ成長してきた子どもたち。朝のテントの撤収から出発への動きも様になってきた。今日はファイナルツアーである。コースの締めくくりとなる1日は順調に始まった。

鍛冶ヶ原林道から十種ヶ峰の山頂を目指すのだが、今日の行程は最初にこれでもかという急登を登っていく。下が見える高度による恐怖と滑りやすい足下が子どもたちの歩みを遅くする。しかし初日からここまでくると上手に声をかけ合いながら、お互いに支え合いながらしっかりと着実に登っていった。

稜線に出て十種ヶ峰の林道を目指した子どもたち。台風のせいで地図読みをしながら山を歩く行程が削られたため、ここからの本格的な地図読みによる山歩きはハードルが高い。それでも子どもたちはみんなで話し合いながら、お互いの意見を尊重し、グループとしての意思決定をしながら、山頂を目指して進んでいく。

各班の子どもたちが目一杯の挑戦をしている。子どもたちを山頂まで行かせてあげたいと、本部スタッフは想定より長時間歩いている子どもたちの水分補給のために水を山頂へ運ぶことも含めて全力でサポートした。

本部スタッフが水を山頂へ運び終えた頃、山頂へ子どもたちの元気な声が聞こえてくる。こちらからの呼びかけにも大きな声が返ってきた。

1班、また1班と子どもたちが山頂へ到着。それぞれ8人でやりとげた大きな達成感と充実感で山頂には笑顔と涙と笑い声が広がった。「Good job!」

山頂ではそれぞれの班が今日まで歩いてきた道のりを振り返ったり、お互いを称え合ったりと、ステキな時間を過ごした。今日はテン場を山頂直下の電波塔周辺に設定して順次下山していった。

この日の夕食の温かいうどんが、疲れた体にしみわたる。たくさんのドラマがあった1日をゆっくり振り返った。



8日目 「クリーンナップ」

期 日：平成30年8月3日（金）

場 所：電波塔周辺～十種ヶ峰青少年自然の家

今日は自然の家のキャンプ場へ戻ってクリーンナップをする日となる。子どもたちはこの旅最後となるグループのバックパッキングを行い、楽しそうに話をしながらキャンプ場へ戻ってきた。

キャンプ場ではこの日までお世話になった装備のクリーンナップを行う。テントやザックについた泥などの汚れを落とす。8月には中高生のクエストプログラムで装備を使用する。また来年度以降も子どもたちが使用する。再びきれいにして次の人へつないでいく。初日、初めて手にした装備のザックやスパッツの汚れがここまでの8日間の活動を思い起こさせる。出会ったばかりで微妙な距離感だった8人が寄り添いながら作業をしている。もうすぐコースの終わりがやってくる。いろいろな思いが頭の中にあることだろう。

午後には待ちに待った入浴の時間だ。今回は台風によりコースを変更したため、ディップを1度しかできなかった。久しぶりのお風呂でさっぱりした子どもたちは再びクリーンナップを頑張った。

全行程のご褒美メニューのちらし寿司をみんなで食べ、ラストナイトミーティングへ。ここまでやってこられたことを振り返り、お互いに感謝をしながらも、最後まで諦めずに歩みを止めなかった自分の頑張りに気づき、次から次へと思いが溢れ出し、最後の夜は更けていった。



9日目「個人ラン・閉会式」

期 日：平成30年8月4日（土）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

最終日、起きてきた子どもたちはクリーンアップの仕上げに入る。間もなく終わりの時間が来る。仲間と過ごせる最後の時間をみんな分かっている。空いた時間を利用してバンダナに寄せ書きをしている子どもたち。仲間を想い、笑顔で思いを伝え合うステキな時間を共有できた。

同時にインストラクターは保護者との懇談を行う。プログラム中の出来事を保護者へと伝える。保護者にとっても、この9日間は1つのチャレンジであったと思う。我が子が長い間家を離れ連絡も取らないということは、笑顔で送り出したものの大丈夫であろうかという不安もあったことだろう。インストラクターから様々な場面でのチャレンジや頑張りが伝えられ、学校や家にいたときには想像もできなかった子どもたちの様子を伝えられた保護者は驚きや感動を覚えていたようである。



クリーンアップを終えて、インストラクターが保護者との懇談を終えると、いよいよ最後のプログラム、個人ランである。初日から今日に至るまで、初めて出会った8人がそれぞれの目標とグループの目標に向けて常に一緒に活動してステキな仲間になったが、この後の閉会式を終えると各自の生活に戻っていかなくてはならない。この個人ランはそれぞれの生活への旅立ちの儀式である。8人がそれぞれ目標を設定し、その目標に向けて頑張る。そしてそれは競走ではない。個人のチャレンジだがこのキャンプに参加する今までと違うのは9日間をともにした他の7人の仲間も同じように頑張っているところである。心の中には、理解し合える仲間がいる。そのことも感じつつ頑張りたい。その感覚は明日以降の実生活に戻っても同じである。

スタートをして各自のチャレンジが始まった。みんなそれぞれの目標に向かって走っている。仲間とすれ違うときにはそっと一声かけたり、頑張る仲間のその姿を見てギアを1つ上げたりと、みんなが素晴らしいチャレンジをした。全てを出し切ってゴールする子どもたちをインストラクターは最高の笑顔で迎える。1人、また1人と帰ってくる子どもたち、先にゴールした子どもたちと一緒に最後の1人がゴールするまでみんなで盛大にお迎えした。「Good job!」「Nice Challenge!!」



閉会式では子どもたちが1人ずつこの9日間で見つけた「自分のできること」「自分のこれから頑張ること」を発表した。開会式で伝えていた「自分の新しい発見」である。みんな自分を知り、そこから1歩前に出る経験をしてきた。子どもたちは家庭や学校に戻ってからの目標も添えて元気よく発表してくれた。最後に子どもたちに、9日間でどんなときでも「やってみよう」とチャレンジしてきたことの素晴らしさやこれからいろいろなことがあっても少しずつでも頑張ることの大切さを話した。今日で離ればなれになるけど思いを共有できる仲間が県内で頑張っている、家には1番の

理解者の家族もいる、1人ではないということも伝えて締めくくった。

チャレンジプログラムを終えて子どもたちはここから新しい1歩を踏み出した。これからどんな試練が待っていようと信じるまま進んでいって欲しい、挑み続けて欲しいと願い、インストラクター、サブインストラクター、本部スタッフ等、みんなで見送った。「みんな、行ってらっしゃい！」

【参加者の感想より】

- 仲間の大切さが分かった。
- 仲間がいないとできないこともあるんだなあ、とソロをやっている時に思った。
- 自分が成長したと思ったことは、今まで以上にお礼が言えるようになったことです。
- 「自然」は怖くもあり、うれしく楽しくもあるということが分かった。
- 自分が納得するまで話し合うことが大切だと思いました。
- このキャンプは班の仲間がいたから成長できたんだと思います。一人でこんなキツイことしても私だったらあきらめてると思うからです。仲間と話したりキツイことをしたり食事をしたり。でも一人だったらさみしいし、仲間が助けてくれると頑張ろうって気持ちになりました。
- サマースクールの経験を生かさないとここに来た意味がないと思ったから、はっきり自分の意見を言えるようにこれからもがんばりたいと思います。
- 他の人に頼らず自分も一生懸命やろうと思いました。
- 日常生活にもどったら、水や紙のむだ使いをできるだけしないようにする。
- 小さな失敗をおそれないで、どんどんチャレンジをしていこうと思います。
- お昼ご飯のときに「おいしいね！」と声をかけてくれて、うれしかったです。
- 荷物をパッキングするのに「手伝って～」と言うとすぐにだれかが手を出すところがとても好きでした。
- 自分が物を落としたときに、「探すの嫌だ」と言わずに探してくれたのでとてもうれしかった。
- これまでは、自分の意見と人の意見が違うと何か言われるのではないかと考えて自分に「自信」が持てなかったけど、持てるようになりました。

